

阿波国退去後の平島公方 断章 (2)

——「足利家文書」天保六年未正月吉日記録——

須藤茂樹

はじめに

阿波国退去後の平島公方の動向を明らかにするために関係史料の紹介を試みているが、⁽¹⁾本稿はそのパート2である。

ここでは、「足利家文書」のうち「天保六年未正月吉日記録」を紹介する。

「足利家文書」天保六年未正月吉日記録の紹介

(表紙)

三番

天保六年未正月吉日

記録

(一丁目表)

一家治公御筆先年松嶋様を被進候絹地ニ

芦ニ雁之画無拠何方へ成共御讓被成度、仍而、

ミすや源兵衛へ頼込、多飛驒守ト申輩人江

相讓候由、夫の紀伊様江持参候由、源兵衛の金

阿波国退去後の平島公方 断章 (2) ——「足利家文書」天保六年未正月吉日記録——

廿五両落手、内源兵衛へ為挨拶六両差遣候、残
十九両二月八日ニ差上候事、 斯波左馬之助

右其後間違之儀有之趣ニ而早紀州表へ

三月三日立ニ而罷下り候、委細別番ニ記ス

未五月

(一丁目裏)

右之趣、委渡辺大膳殿へ掛合、其後追々調ニ
相成候、以上、

一源兵衛召連 御屋舗へ罷出候而、留守居の相尋候事も

御座候、随而其後者猶又留守居の飛驒守相調候趣、
己来何之沙汰も無之、其儘ニ相成御座候、左馬之助儀、

右一件ニ付早者南紀斗差和名前不出候、

一銀三十枚 御賄料

右例之通、先記ニ有、仍而略之、

手形名前 上秋

朝 印

(二丁目表)

一阿州名東郡芝原村岸多助弟多三郎へ天明四年之頃、

御歌入被 仰付、其砌脇指被 下置候、其後出火ニ而御書附

焼失いたし候故、此度願出候得共、先年之事故分り兼、

仍而富山牧之丞方へ願出し候様申付候所、其後富山へ願出、則

添書持参願出候ニ付、左之書附清次郎へ遣候事、

一棒鞘

老腰

銘伊賀守貞次

右被 下置候間、難有可奉頂戴者也、

(貼紙)

天明四亥三月

上杉権大夫印

是迄無怠相勤

多三郎へ

右之通ニ候、外ニ 御歌入書付願書ト一所ニ移シ有之、仍而略候、以上、

(二丁目裏)

天保六未十一月ニ認遣候、

一吉見崑八 住友大介 死去いたし候、

喜八義者跡式願延引、

大介義者、嫡子多病ニ付次男江 小竹 跡式奉願候、依而

申十月申渡ス、

一木津願泉寺者加納大隅守殿親類重縁、右願泉寺ト

大徳寺中碧玉大持座首ト親類之由

(四丁目表)

一貴札致拝見候、其段之砌御座候所、御揃愈御安全

可被成御座、珍重之御儀奉存候、誠先頃者御上京、

始而得拝眉大慶之至奉存候、其後無御故障御

帰国被成奉珍重候、猶又今般焼蝶一折為挨拶

御恵投忝奉存候、右御札貴報如斯御座候、恐惶謹言、

—— 足利中務

(三丁目表)

天保七年申正月吉日改

一大坂秋田美喜藏并母願出候義、美喜藏幼少ニ付、為後見

姉へ養子仕度願出 御聞届ケ被 仰付候、尤給人格ニ而御座候、

真教院様

義直（花押）

右之通御書通、隨而御取遣候御文例大徳御同様

申三月

（四丁目裏）

奉願覚

△一私儀不相変奉蒙 御高恩無恙家名相統仕

難有仕合奉存候、然所近年引続米穀高價ニ

御座候所、猶又當年甚敷高價ニ相成、日々費用

不少大ニ難渋仕候、附而者聊 拝借等相願度奉存候

得とも、御時節柄奉恐入候故、来西年御賄料

之内銀拾五枚拝借仕度奉存候、此儀も如何敷奉

恐入候得共、明年 御賄料之内半数拝借奉願候

儀者、誠ニ不得止次第御推察被成下、可然御取成

之程偏奉希候、以上、

九月

足利左衛門

（五丁目表）

御花押

加納大隅守様・伊達但馬守様・鈴木與助様

右奉書半切ニ認、左之格段書一所ニ包、

格段得貴意候、秋冷之節御座候所、先以愈御安全可被成、御

勤行珍重御儀奉存候、然者今般不得止奉願度、則別紙之

通、宜御取斗奉頼候、右段出府仕、可御頼上候筈之所、病中

其上甚以無人ニ付無廻京都 御屋舗迄以使者御頼申出候

間、御用繁中乍御面倒宜御執成奉頼候、已上、

右杓原半切ニ相認、美濃紙折返し

上之字下ニ御名入、其上包書付、認ム

（五丁目裏）

一加納家人人中へ上杉・朝両人へ添書文段略之、

上杓権大夫 頼顕（花押）

朝都一郎 宜瞻（花押）

右之通、持参相勤申候、使者 朝都二郎

申九月十二日

一乍序飛驒守一件相尋候所、同人御歌入差止メ

相済候由承り歸り候、

右同日

（六丁目表）

一豆村利八郎・仁木喜作へ左衛門様御直當ニ而書状

當着、城内より持参、文言者近日両人上京之由申出候、

九月上旬

一森崎久之介十月朔日引取今吉原迄病氣之趣申来、

早速市造参、言上相談之上、翌二日ニ又見舞ニ参候所、

彼は世話いたし候内死去之由候而、郁太郎・常三郎・吉原

其余家代引取之者共打寄、同夜密葬致遣候、

十月二日

一諸物高價ニ付、價浪弄一統之者御尋被 仰出、野田へ

(六丁目裏)

書状差遣候、森井江も尚心添候様申達候事、

十月六日

三山江頼一条之事、内々福泉・寶篋手統ニ候、

一爾来御當山并相國寺・等持院厚願御高配之儀者

難速^(難カ)言語候、依之一統無難致寓居候段、千萬之所、

仕合ニ候、就中從 紀伊殿年々御賄料被贈下

候得共、何分行届兼候ニ付而者、無挽他借等仕、當

時之防仕罷通候得共、是以賄宛^与者乍申、其

積捌、是又當惑至極ニ候、其上近来諸物

(七丁目表)

高價打統窮国之上、誠以難決不一方候、勿論

紀州表^江も猶又歎申出候得共、相定之外ニ候得者、

聊之事即算之防而已ニ候、随而余ニ勘弁之

道茂無御座、甚以申出兼候得共、何卒御三山へ

暫之所不抱員数思召之所を以御助成被成下

度、^而諛奉頼候、此段御許容於被成下候ニ者、追

々趣方相立候様、勘弁可仕、尤是追星霜者

乍預御高配、右様之儀申出候段、言語同断

(七丁目裏)

之至ニ候得共、不顧始末御題申出候旨趣、実ニ

無余儀次第、幾重ニも御恕察成下、宜しく

取成之程、偏御頼申度旨被申付候、此段

可然御披露被成下、何分ニも御慈愛之御

評議伏^而奉希候、以上、

十月

朝郁太郎

花押

斯波左馬之介

花押

天龍寺

御役者中

(八丁目表)

右之通、中奉書半切ニ認、美濃紙折返し

上ニ演舌^与認、兩人早天へ相廻り、三山同日ニ廻勤、

夫々へ持参頼込置候、

申十月九日

猶又翌日 中務様三山御廻り被遊候、

但し相国光源院、天龍香寧院へも御供候、

御立寄候、

朝郁次郎

葭原市造

同十日

一於等持院三山評議^{參段}天龍へ宝篋院役者蔵光菴相国へ

參段、銀閣寺其余等持院寺中夕方早呼懸ニ付被

出候所、前文御頼候ニ付、天龍へ五石、相国寺へ五石、等持院へ二石、

(八丁目裏)

都合拾式斛、當申年へ子年迄五ヶ年之間、御助成

可申由承り、早速被罷帰、此段申上候、

申

十月十八日

上杉權太夫 印

木村條右衛門殿

一天龍寺・相国寺・等持院、惣代福泉菴七本松江

美濃紙相認、同折返し、上ニ手形_ト認、

挨拶旁來臨、夕飯出し候由、

御禮申上候、御賄料之内、當年_江半数

十月廿日

一右三山_江成助請挨拶御使者差出申候、

(十丁目表)

十月廿一日 使者 左馬之介

御引揚_ニ而奉蒙 御仁惠候段、冥加至極難有

郁太郎

仕合奉存候、右御請 御屋舖迄乍略儀以使着

(九丁目表)

右杉原半切_ニ認、半紙折返し、袖控_ト認持參、

一紀州御屋舖より呼懸_ニ付、郁太郎罷出御包物請取認、

十月十五日_ニ相勤申候、 使者朝郁太郎

願之趣御許容被 仰付候、

一近來米價高値に付、被及難渋候由_ニ而、被相願候趣、

無余儀相聞候付、内存之通、來酉年分銀三拾枚

之内拾五枚當年_江引揚可被相贈候条、可被

得其意事、 此御請書者此通故略之、

右十五日當着、隨而御請書杉原半切美濃紙_紙

折返し、上_ニ御請_ト認、左之請取手形并御替敷_手

請書所_ニ持參、隨而一物請取帰_リ候、

十月十九日

(十丁目裏)

無人_ニ付、乍略儀京都 御屋舖迄御頼申出候得共、

猶又右御礼之義、 大隅守様迄申上度奉存候

間、可然御取斗奉願度、此段各樣_江御頼申出候

様、左衛門申付如斯御座候、恐惶謹言、

十月 朝郁太郎 花押

一銀拾五枚

上杉權太夫 花押

右者此度左衛門_江來酉年御賄料之内被 下置、

慥_ニ奉請取候、以上、

申十月 朝郁太郎 印

置候様、是又申付候、以上、

遠藤藏主様・玉木要人様・吉田勘右衛門様

追啓得其意候、御用繁中御答之義御断申

（十一丁目表）

右両日後レ御屋鋪、迄吉原持參候、

一天龍・相国・等持院江助成御挨拶御越被遊候、

十一月四日

覺

一米五石也

右者、今般主家江當申年御助成健ニ受納仕候、以上、

申十一月

朝郁太郎

印

斯波左馬之介

印

天龍寺

御役者中

（十一丁目裏）

右之通美濃紙ニ認、同折返シ、三山ヘ差出候、
上ニ手形ト認、

一我等妻貴候ニ付相願候所、可然相談候様被 仰出候、

右朝申来、

十一月廿日夜

一時節柄諸式高價ニ付、三山今助成米之内

壹石拂代金百八拾目也、右大坂御家中ヘ

為 御救壹軒金貳朱ツ被 下置候、夫々

難有頂戴仕候、野田半藏・桃井兵衛、夫々

持廻り遣候、請書取之、差登候割上置候、

（十二丁目表）

右名前、左之通、

但し包ニ而上ニ南鐐トモト認、

申十二月廿日相渡ス、

桃井兵衛

秋田美喜藏

高橋弓藏 天保八四月妻裡□

細川刑部

野田半藏

堀小文作

森幸介

富永道之進 天保八四月真測伊文太死

真測團藏

朝 棟藏

朝 當介 天保八西五月死

大隅又次郎

大隅武次郎

板東要介

住友庄助

林文之作

谷川惣作

吉見昇兵衛 西四月死去

吉見喜八 申年死去

吉見宇兵ヘ

青木八重

原喜市

（十二丁目裏）

白紙

（十三丁目表）

天保八西正月吉日改

（十三丁目裏）

一南紀年始来ル二月御下向ニ付、京御屋鋪迄使者

を以暫御延引之御断申立置候、

使者

酉正月十五日

朝郁太郎

覺

一銀十五枚

右者左衛門^{江當酉}年御賄料被 下置候、
尤昨年奉願十五枚被 下置、残十五枚今般

(十四丁目表)

慥^ニ受取候、以上、

酉二月十三日

朝郁太郎 印

上杉権太夫 印

木村條右衛門殿

御禮申上候、……例之通尤昨年

半奉願候品も有之、文例少し違、

杉原半切美濃折返し、上^ニ御請御名認、

二月十三日

一御仁恵御礼書状、遠藤・玉木・吉田三人^江

(十四丁目裏)

例之通、文例前文^ニ記、略之、

酉

上杉・朝両人^分

二月廿日

一南紀表年頭御下向、例之通、

酉

二月廿二日御発足

御供 上杉・吉原

一大坂出火、十九日^分廿三日迄御家中十軒類焼、大塩平八郎^卜

申者発徒之由、二月、

一相国寺光源院遷化^ニ付、香尊箱入送^ル

五月

(十五丁目表)

一一条様薨去^ニ付、香尊三升箱入基^ニ乗献上、

六月十一日

一鎖鐘^ニ付南紀表へ歎願、今十五両願文略之、京

御屋鋪^迄封物^ニ而持参、使者朝郁太郎

三浦 久野 加納

山中 伊達 鈴木

酉六月十六日

奉書半切、例之通、

(十五丁目裏)

一南紀奥中御伺例之通、西濱様へ同断、

但し渥見源五郎殿へ京御屋鋪へ御使者

郁太郎

六月廿三日

杉原半切美濃折返し、上^ニ御名斗又上包

書付包式通^ニして、

一歎願御断書付到来、郁太郎取^ニ参候、

七月

(十六丁目表)

一御書付謹而拝見仕候、此節諸物高價^ニ付、金

十五両拝借仕度旨之品^ニ付、委曲奉願候趣、被為

及御評議候處、年柄無拋趣之御察被

仰付候得共、何レ先達而御議定之御品も有之、

御極被 下置候之外、右躰拝借等之儀者、難

難被為及御取扱候段被 仰出奉畏候、右御

請之義、可然様御名斗之程偏奉希候、以上、

右之通奉書半切相認、美濃折返、

上三御名上包書付ト相認、

酉七月

（十六丁目裏）

格段左衛門得貴意候、先般無拋次第三付、奉念

願候所、早速御取斗被成下候段、不殘奉存候、

乍序有御挨拶奉得貴意候、随而御書付を以

被 仰出、謹而奉拝見候、右御請御札申上候

義、差當無人ニ付、乍略儀京都 御屋鋪迄

差出御願申出候間、可然御取斗之程宜奉頼候、已上、

右同半切相認、一所ニ折返ニ入ル、

七月十七日認申候、

（十七丁目表）

一御筆之義ニ付早引籠之所、内々留守居迄郁太郎

相談候所、書取差出候様申ニ付、左之通差出候、

一御屋鋪内尋之草稿七本程有之候、

西濱様江御口上扣

源五郎様江左衛門得其意候、乍恐

前大納言様江寒中御伺奉申上候、随而出府仕、

然様御執成之程、偏ニ奉頼候、以上、

格段得貴意候、甚寒之砌、弥御安全被成御勤行

（十七丁目裏）

珍重奉存候、随而出府仕、御伺奉申上候筈之所、

病中旅行等難相調、其上無人ニ付、甚以略儀

之至、奉恐入候得共、無拋京都 御屋鋪迄

使者を以御頼申出候間、何分宜御執成奉頼候、以上、

右杉原半切美濃紙折返シ、上三御名認、又

上包書与認候、

酉十二月

（十八丁目表）

天保十二丑年〆

天龍寺 三石

相国寺 五石

同十三寅年〆

等持院 壱石

同卯年〆

式石

考 察

ここに紹介した「足利家文書」の内、「天保六年未正月吉日三番記録」は、表題に「正月」とあるものの、天保六年（一八三五）五月から同八年十二月までを記した公用日記・記録である。特に天保六年は五月と十一月のみで記載は少ない。同七年は六月から十二月までの記録が見られる。同

八年は正月から十二月まで記されている。しかし、いずれの年も毎日丹念に克明に記されていない。

天保六年（一八三五）は、足利義根が阿波平島の地を退去した文化二年（一八〇二）から三十三年が経過している。冒頭から將軍徳川家治親筆の「菅に雁図」を売却するという記述をみることができる。南紀あるいは紀伊と見えるのは紀州徳川家と推察され、同家から賄料を得ていたと思われる。「西浜」と見えるのは、文政元年（一八一八）～九年（一八二六）に一〇代藩主治宝が造営した別邸・大名庭園である。現在は国名勝「養翠園」として公開されている。加納・伊達は家老、渥美は側用人である。また、それらの収入だけでは不足が生じ、賄料の前借を願ひ出ている。さらには、天龍寺・相国寺・等持院など足利將軍家由緒の寺院から助成金を受けている。その背景には、天保の飢饉やそれに伴う諸物価の高騰があったことが読み取ることができる。

本史料からは、足利側は上杉権太夫・朝郁太郎・斯波右馬之介らが主に交渉の窓口になっていることやそのほかにどのような家臣が仕えていたかがわかる。姓だけを見ると、細川・斯波・桃井・吉見など足利將軍家に縁のある名を見出すことができる。また、京都だけではなく、大坂にも家臣がいたようである。大塩平八郎の動向も見える。また、文書の発給の形式などを詳しく記しているのも当時の書札札を知る上で興味深い。

【註】

（１） 拙稿「阿波退去後の平島公方 断章―「足利家文書」足利参詣請書の紹介―」『言語文化』九号 四国大学附属言語文化研究所 二〇一一年二月

【付記】

史料の紹介にあたっては、阿南市阿波公方・民俗資料館の便宜を得た。また、

解説にあたっては、松下師一氏（松茂町人形浄瑠璃芝居資料館・歴史民俗資料館学芸員）の協力を得た。記して深甚の謝意を表する次第である。

（四国大学文学部日本文学科日本文化史研究室）